2025（令和７）年度

# 小　論　文

10：00 ～ 11：30

## 教養学部

## 学校教育学科

## 学校推薦型選抜（一般）

**注　意　事　項**

1. 合図があるまで、この冊子と解答用紙を開いてはいけません。
2. 合図があったら最初に、受験番号を解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. この冊子と解答用紙について、印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答用紙は２枚配布しますが、１枚だけ提出しなさい。残りの１枚は下書き用です。
5. 解答は**縦書き**で書きなさい。
6. この冊子と下書きに用いた解答用紙は、持ち帰ってください。

**課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。**

**課題文**

現代の人たちは、偶然を受け入れることが難しくなっています。なぜか。都市化が進んできたからです。私の言葉で言えば「脳化」です。

戦後日本の特徴を一言で言えば、都市化に尽きます。戦後の日本社会に起こったことは、本質的にはそれだけだと言ってもいいくらいです。都会の人々は自然を「ない」ことにしています。

木や草が生えていても、建物のない空間を見ると、都会の人は「空き地がある」と言うでしょう。人間が利用しない限り、それは空き地だという感覚です。

空き地って「空いている」ということです。ところがそこには木が生えて、鳥がいて、虫がいて、モグラもいるかもしれない。生き物がいるのだから、空っぽなんてことはありません。それでも都会の人にとっては、そこは「空き地」でしかないのです。

それなら、木も鳥も虫もモグラも、「いない」のと同じです。なにしろ空き地、空っぽなんですから。要するに木が生えている場所は、空き地に見える。そうすると、木のようなものは「ないこと」になってしまうわけです。

なぜ自然がないことになるのかというと、空き地の木には社会的・経済的価値がないからです。都会で「ある」のは、売り買いできるものです。売れないものは、現実に「ない」も同然。だから「空き地」と言われるのです。

岡山県の小さな古い神社で、宮司さんが社殿を建て直したいと思いました。その宮司さんが何をしたかというと、境内に生えている樹齢八百年のケヤキを切って売った。その金で社殿を建て直しました。八百年のケヤキを保たせておけば、二千年のケヤキになるかもしれません。大勢の人がそれを眺めて心を癒すことでしょう。でも、それを売ったお金で建てた社殿は、千年はぜったいに保ちません。これがいまの世の中です。

社会的・経済的価値のある・なしは、現実と深く関わっています。いまの社会では、自然そのものに価値はありません。観光業では自然を大切にしていると言いますが、それはお金になるからです。お金にならない限り価値がないということは、それ自体には価値がないということです。なぜ価値がないかというと、多くの人にとって、自然が現実ではないからです。現実ではないものに、私たちが左右されることはありません。つまり、現実ではない自然は、行動に影響を与えないのです。

不動産業者にとっても、財務省のお役人にとっても、地面に生えている木なんて、切ってしまうだけのものです。誰かに切らせて、更地にする。どうして切るかというと、本来「ない」はずのものだからです。

そこに木が生えているから、家の建て方を変えよう。川や森があるから、町のつくり方を工夫しよう。そう思うなら、木や川、森はあなたにとって現実です。でも、更地にする人にとっては、木は「現実ではない」。現実ではないのですが、実際には生えていますから、邪魔物扱いをして切ってしまう。まさしく木を「消す」のです。

頭の中から消し、実際に切ってしまって、現実からも消すのです。不動産業者もお役人も、自分が扱っているのは「土地そのもの」だと思っている。土地なんですから、更地に決まってるじゃないですか。まして地面の下に棲んでるモグラや、葉っぱについている虫なんて、まったく無視されます。「現実ではない」(ア)からです。

こういう世界で、子どもにまともに価値が置かれるはずがありません。子どもの先行きなど、誰もわからないからです。子どもにどれだけの元手をかけたらいいかなんて計算できません。さんざんお金をかけても、ドラ息子になるかもしれない。現代社会では、そういう先が読めないものには、利口な人は投資しません。だから、自然と同じように、子どももいなくなるのです。

いや、子どもはいるじゃないか。たしかに、子どもはいます。しかし、それは空き地の木があるのと同じです。いるにはいるけれど、子どもそれ自体には価値がない。現実ではないもの、つまり社会的・経済的価値がわからないものに、価値のつけようはないのです。

木を消すのと同じ感覚で、いまの子どもは、早く大人になれと言われています。都市は大人がつくる世界です。都市の中にさっさと入れ。そうすれば、子どもはいなくなりますから。

都会人にとっては、幼児期とは「やむを得ないもの」です。はっきり言えば、必要悪になっています。子どもがいきなり大人になれるわけがない。でも、いきなり大人になってくれたら便利だろう。都会の親は、どこかでそう思っているふしがある。

ところが田畑を耕して、種を蒔いている田舎の生活から考えたら、子どもがいるというのは、あまりにも当たり前のことです。人間の種を蒔いて、ちゃんと世話して育てる。育つまで「手入れ」をする。稲やキュウリと同じで、それで当たり前です。そういう社会では、子育てと仕事との間に原理的な矛盾がないわけです。具体的にやることも同じです。イ「ああすれば、こうなる」ではなく、あくまで「手入れ」です。

それに対して、会社のような組織の中で働くと、仕事には、「手入れ」とは違った合理性が徹底的に要求されます。その合理性を私は「ああすれば、こうなる」と表現します。

なぜそんなバカなことをしたのか。結果の出る仕組みを作れと言っただろう。都会の人は上役からそう叱られます。頭の中できちんとシミュレーションをして、望ましい結果になるように、自分の行動もビジネスも設計しなければならない。それを絶えずやらされるのが会社の仕事です。

子育てはそうはいきません。「ああすれば、こうなる」どころか、しばしば「どうしたらいいか、わからない」の連続です。自然とはもともと、「どうなるかわからない」ものです。子どもは車でもコンピュータでもありません。部品を組み立てれば、思い通りに動くわけじゃない。先々どうなるのか、親だってわからないのです。

人間が相手にする対象が、都会と地方ではまったく違います。意識的に作られたものであれば、都市的合理性、つまり「ああすれば、こうなる」でとことん押していけます。自動車が動かなければ、ガソリン切れか、さもなければ必ずどこかが壊れています。どこが壊れているか、専門家が調べれば必ずわかる。どこも壊れていないのに動かない自動車は存在しません。

都会には人間の作ったものしかありません。人間の作ったものには設計図があります。子どもは違います。うちの子がなんだか変だと言っても、設計図がもともとないので、どこがおかしいのか、はっきりとわかるものではありません。

その意味で、子どもは不合理な存在です。都会には不合理な存在を相手にしたくない人が大勢います。子どもをもう産みたくない。子どもを持ってもしょうがない。それが少子化です。

空き地の樹木を育てるより、もっと確実に儲かる話があるんじゃないか。こうやったら立派な木に育つんじゃないかというふうなことについては、考えたくない。そのくらいなら、きちんと計算できて結果が出ることをやりたい。学校秀才の世界です。地方でも学校秀才が増えれば、自然がなくなり、子どももいなくなります。ですから、少子化と地方の過疎化は同じ現象です。現に都市には人が大勢います。日本中が都市化した結果です。

シミュレーションをやって、その結果作った宇宙船がちゃんと飛ぶ。そういうことに都会人は感心します。日々手入れをして、作物をちゃんと育てる。そのつもりが冷害で、収穫がなかった。そんなことは、したがりません。あんなことして、バカだなあと思っています。

シミュレーションができない状況になると、都会の人は「どうすればいいんだ」と必ず訊きます。この質問が出ること自体、「ああすれば、こうなる」が前提になっています。そこで「シミュレーションができないんだよ」とまた言うと、「じゃあ、どうすりゃいいんだ」とまた訊いてきます。

知るとは、自分が変わることだと言いました。どう変わるかのシミュレーションなんてできるはずがありません。だから、「ああすれば、こうなる」が前提の都会では知ることが難しくなるのです。

〔出典：養老孟司『ものがわかるということ』（二〇二三年　祥伝社）ただし一部改変した。〕

**設問一**　傍線部アで、筆者は、「現実ではない」と述べていますが、それは、どういうことですか。課題文に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。

**設問二**　傍線部イの「『ああすれば、こうなる』ではなく、あくまで『手入れ』です。」とはどのようなことか、課題文の趣旨を踏まえながら、あなたの体験や見聞を交えて六〇〇字以内で論じなさい。